

若者と宗教

（平成12年度倫理学専攻講演会講演要旨）

弓山達也

1、はじめに

NHK放送世論研究所(1979)がオイルショック以降の日本の宗教動向を「神仏信心への回帰現象」「大幅にふえた現世利益行動」と規定してから久しい。その後、「心の時代」「宗教ブーム」など、現代を宗教が流行しているとみなす論説が広く流布しているのは周知の通りである。「ブーム」「流行」であるかは別として、1970年代以降台頭してきた、いわゆる新新宗教が、それまでの新宗教とは違った様相を呈しているのは事実であろう。いくつか入信に関するデータを並べてみると、それはより明白になるかもしれない。

例えば、森岡清美(1989)によれば、1946年から50年に入信した信者に関する東京の立正佼成会調査(1968年『佼成新聞』調べ)では、病気48%、貧困18%、家庭不18%であり、おおよそ1954年から1962年にかけて入信した信者に関する福岡市の創価学会員調査(1962年調べ)では、鈴木広(1970)は病気28%、人にいわれて25%、家族関係16%、お金に困り13%、自分個人の問題10%と指摘する。

一方、新新宗教と目される教団では次のようになっている。1970年代、80年代に成長をとげた真如苑霊能者の調査(1990～92年調べ)では[川端亮(1992)]、入信動機は先祖の供養17.7%、精神修養14.6%、人に勧められたから12.5%、病気11.9%。1970年代後半から信者の増加が指摘される崇教真光の真光青年隊の調査(1987年調べ)では[谷富夫(1993)]、入信動機が霊界志向23.9%、理由なし22.7%、病気21.9%、家庭の問題7.1%。1990年から翌年にかけて急成長した幸福の科学の調査(1993～94年調べ)では[深水・竹沢(????)]、「入信のきっかけ」は真理を求めて69%、世の中を良くするため10%、家族が信者であったから5%。そしてほぼ同時期に世間の注目を集めたオウム真理教の出家修行者アンケート(1995年調べ、『ヴァジラヤーナ・サッチャ』12、1995:p.23)では入会・入信理由が精神性の向上38.0%、解脱・悟り18.9%、超能力15.5%、現世願望成就9.0%。

もちろん、サンプリングも調査方法も違うので、安易な比較は許されないが、ここからは新宗教への入信動機が「貧・病・争」から「精神的なもの」に変化しているのうかがえる。特に1970年代以降台頭してきたといわれる、いわゆる新新宗教では、

「精神的なもの」が入信理由になることが指摘され、そのなかでもとりわけオウムのこうした傾向については注目を集めてきた。確かに上のアンケート（pp. 44-46）では「出家の目的は何ですか」に対して解脱・悟り33.8%、救済活動・利他心28.3%、精神性向上・心の成熟23.2%という回答を得ている。もちろん「精神的なるもの」の追求は何もオウム、そしてそれを含む新新宗教だけに限ったことではないが、昔日の「貧・病・争」の入信動機とは際立った対照をなしている。

上のデータでは新宗教への入信動機に限定したが、少し注意深く見れば、実際は多くの新宗教に信者が集まっているわけではないことがわかる。むしろ新新宗教以外の宗教教団の教勢は横這いか下降線をたどっている。つまり、現状は井上順孝(1996)がいうように、決して実態通りとはいえない、マスメディアによる「宗教情報ブーム」というのが相応しいだろうし、また、教団といった組織をともしないオカルトや超常現象に憧れる「教団嫌いの神秘好き」といった状況が看取できる。そうすると現代人の広い意味での宗教的関心は宗教教団にではなく、別の方向、いわば精神世界に向かっていくとみていいかもしれない。本報告では現代日本における宗教的動向を、オウムや精神世界など、若者と宗教との関わりを中心に、その背景を論じていきたいと思う。

2、オウム信者の体験談

先のアンケートによればオウムでは「解脱」や「悟り」が重要な意義を持っていることが看取できるが、では信者はなぜこれらを求めるのであろうか。筆者は1995年5月11日、南青山東京総本部道場において奈良市出身で教団関連会社のマハーボーシャ勤務の女性信者(29歳)にインタビューした。彼女は前年12月にオウム真理教に入信し、地下鉄サリン事件をきっかけに頭を丸めて出家を志し、当時はその準備として東京に出てきていた。「両親は不仲でもなく、立派な人だし、自分は恵まれている方だと思う」と語る彼女は、偶然駅のホームで知合った信者に連れられて大阪支部に行き、書籍を借りたことからオウムとの関わりができたという。彼女は自分の入信の背景をこう分析する。

「なんか特に不幸というわけじゃないけど、一種のぜいたく病ね。夜になると時々、わーって泣いてしまって長電話したり、話し相手が欲しかったの。どっか寂しい部分があったんですかねー。虚しいっていうか、無常感っていうか……。欲すれば欲するほど満たされないっていうか。この状態でいたいと思っても、そのままいられる訳じ

やないじゃない。例えば若くても歳をとるし、遊んでいても飽きてしまう。なんかライフワークみたいなものを探していたの。ずっと飽きないでやれるようなもの……。こうした感じ、二〇代後半から強くなってきたの。いつも目的がなくて……。今はいいんだけど、漠然と生きているって感じ。」

ここからは、「貧・病・争」からはほど遠いものの現代人が多かれ少なかれ共有している「人生の虚しさ」が如実に示されている。同じような話は初期「成就者」の体験談には多くみられる。例えば家庭を顧みない父親に代わって、母親の期待を一身に受けたマイトレーヤは、小さい頃からの宇宙に対する関心をいかせる職場である宇宙開発事業団に就職が決まりながら、職場が道場から遠く修行の妨げとなるとして、「実際、四月に会社が始まりまして勤めてみると、そこでは大抵昼間は研修で、夜は飲み会がある。それが毎日続くんですよ。まあ大体毎日が単調に過ぎていく。ようするに自分には無意味に過ぎていく」（『マハーヤーナ』5:p. 116）といって退職・出家した。

また彼との婚約・結婚をひかえながら、彼のあとをおって出家したウッパラバンナーは、豊かな家庭に育ち、いわゆる「お嬢さん」として育てられていたことを、「人生における不満というのは特に感じてはいません。ただ社会的に生活していく上で、物はどんどん増えていくけれども、精神的には何か満たされないというか、何で私は生きているんだろう、ここにいないんだろうという疑問にはぶつかっていました。けれども、誰もそれを教えてくれないし、まだ自分でも見つけられない、そういう状態でしたね」（『マハーヤーナ』7:p. 156）と述懐する。

さらにラクシュミーは「何かもっと違う生き方があるんじゃないか」と思い夫と別れた時にオウムと出会う。エステティシャンとして働きながら、「でもやはりね、本当に綺麗になるためには心から変わっていくしかないな、心が変化しないと全然綺麗にならないんだなっていうのを、その頃から感じていましたね。（略）私も経験としては一通りのことはしました。遊んだり、お酒を飲んだり。でも最終的には何か空しくなるのね。つまらない。本当に飽きてしまう。すぐに飽きてしまう。それにのめり込まないっていうか、いつもつまんないっていう気持ちでね。ただその場合は合せていますけれども今一つこれだっっていうのがなかった。空虚なものを感じていましたね」（『マハーヤーナ』4:p. 75）という。彼女たちの体験記からは物質的には満ち足りているものの、かえてそれが苦痛となっている姿がうかがえる。

3、「豊かさ」の中の苦悩

「豊かな社会」と呼ばれて久しい日本で「救い」を求める現代人にとって、この社会はどのように映ったのだろうか。オウム信者たちの入信理由から、問題がこの「豊かさ」と欲望との関係、とりわけ現代社会における無際限な欲望拡大と、そこでの「虚しさ」にあることが理解できる。ここでいう「豊かさ」とは単に物質的なそれだけでなく、多様な価値観の林立・並立であり、溢れる情報であり、過剰に与えられる機会である。こうしたモノ、価値観、情報、機会などの「豊かさ」が増せば増すほど、我々はより「自由」になるとしてこれらを追求してきた。

だが、モノの「豊かさ」は決して「心の豊かさ」には直結せず、価値観の多様さは価値相対主義を生みだし、過剰な情報と機会の前に我々の判断は鈍りがちである。とりわけ価値相対主義は単なる価値観の多元化を意味するだけでなく、現代では「人に迷惑をかけなければ何をしてもいいんだ」というニヒリズムに陥りやすい。外面的な規制や規範の弛緩が個人の内面において、かえって混乱と欲望の無際限な拡大を生み出すことはデュルケム以来指摘されてきた。また自由が結果としてマスメディアに追随する「孤独な群衆」の他人志向（D. リースマン）や、善悪の絶対的基準を喪失した社会において、その基準を自ら模索しなければならない「自由からの逃走」（E. フロム）へと向かわしめ、それが極端な形で価値の一元化を生み出すことはすでにいわれてきた。

麻原は欲望の拡大を人間の根本的な「苦」ととらえ、それにヨーガの行法とそこで達成されるという「解脱」と「悟り」を対置せしめたところにオウムの特徴がある。もちろん、こうした「豊かさ」の中の苦悩は何もオウムに限ったことではない。例えば筆者が1994年4月9日、第4回国際イルカ・クジラ会議でインタビューしたイルカヒーリングの女性インストラクターはイルカヒーリングに出会う前の自己を「東京でOLをしていた時は毎日がつまらなくて、自分がちっぽけで、生きてるって感じがしてなかった……」と表現していた。同じく1995年9月10日、秋山真人の120%自己実現セミナーで受講者は、「理想の自分の姿をイメージしなさいって言われても……。それが無いからここに来てるんです」と吐露した。いずれも「豊か」ではあるが虚しいという苦しみで共通している。一見「自由」と「平等」が実現されているかのように見える現代日本において、以上のような逆説が顕著なのは皮肉としかいいようがない。

4、この苦悩のメカニズム

1987年、それまでヨーガ・サークルであったオウムが宗教として登場したのが、バブル経済の絶頂期であり、前述のヒーリングをはじめとする自己実現ブームの端緒をなす時期であったことは決して偶然ではない。バブル経済を背景とした「豊かさ」を享受しつつも、そこにある種の苦しみを感じて精神世界に惹かれていったという入信理由は、大手保険会社に勤務し、ディスコやコンパに遊び歩くOL生活に終止符打ったオウム女性幹部には典型的である。そしてこれは現代日本において、救いを求める若者達のおかれている状況を如実に示している。それは「豊かさ」と「自由」のパラドックスともいうべきもので下記のように定式化されよう[芳賀・弓山(1994)]。

①まず現代日本における若者の価値が「自由」に置かれていることは疑いもないだろう。そしてこの傾向に拍車をかける全体状況は、「豊かさ」を背景とした個人主義的傾向、少子化、家族や地域社会の解体など、いくらかでも指摘しうる。ただ、この場合の自由は決して「自律」ではなく、人から邪魔されない気楽さ、気軽さに近い。

②こうした「自由」への傾斜が摩擦回避ともいうべきものと表裏の関係をなしている。摩擦回避とは、博報堂生活総合研究所編(1994)の人間関係・価値観に関する調査によるもので、第2次ベビーブーマー（1971～1974年生）世代の人間関係を、自然体（無理しない、対立しない、我慢しない）、よいこ（まじめ、前向き、楽天的、素直）、低温（思い入れない、現実的、クール）、囲い込み（個人化、ボックス化）の4つの要素から説明するものである。

③だが、こうした摩擦回避、換言すれば「親密さ」に付随する「葛藤」の回避は、必然的にアイデンティティの流動化を生み出す。なぜならばアイデンティティは、他者との持続的な相互作用によって獲得されるものであり、前述の如き「自由」や「摩擦回避」は、むしろアイデンティティの不確定さを生み出すからである。

④アイデンティティの流動化は自信喪失につながり、自信がないから、他者と交わること（親密さと葛藤）が怖い。怖いから自分の内側に引きこもってしまう。引きこもると確かに「気楽」で「気軽」で「自由」だが、これが新たな摩擦回避を再生産する。

もっともこうした「豊かさ」と「自由」のパラドックスを若者の責任にのみ帰すのは、あまりにも酷である。1970年代以降、熱く関われる場（家族・学校・職場・社会）も、力強く生きることができる物語（イデオロギー、理念や理想・・・そして宗教も）もなくなってしまった状況が出来た。人生の大きな岐路に立つことが多い若者は、膨大な情報の中から自分の道を見つけていかななくてはいけない。かき立てられる欲望、必要（need）もないのに、膨らむ欲求（want）・・・その中で「豊かさ」と「自由」

の希求が、明確なイメージも結ばぬまま、昂まり、そしてからまわりしていく。若者と宗教との関わりを見るとき、そのいびつさを単に社会病理やカルト問題として片づけるのは簡単である。むしろ若者の生き甲斐や価値観をどうするのかという社会全体の課題が我々の前に横たわっているのである。

【参考文献】

- 深水顕真・竹沢尚一郎(発行年無):「資料と分析:宗教意識のアンケート調査から」坂井信生・竹沢尚一郎編『西日本の新宗教運動の比較研究』2,九州大学比較宗教学研究室
- 芳賀学・弓山達也(1994):『祈る ふれあう 感じる—自分探しのオデッセー』IPC
- 博報堂生活総合研究所編(1994)『若者—まさつ回避世代』同所
- 井上順孝(1996):『新宗教の解説』ちくま学芸文庫
- 森岡清美(1989):『新宗教運動の展開過程』創文社
- NHK放送世論研究所(1979):『現代日本人の意識構造』日本放送出版協会
- 鈴木広(1970):『都市的世界』誠信書房
- 谷富夫(1993):「新宗教青年層における呪術性と共同性」『アカデミア』人文・社会科学編57